湖東定住自立圏 多賀町との広域連携) (彦 の具体的な取り組み 市と愛荘町、豊郷町、甲良

地産地消の取り組みをすすめています

流推進事業(彦根市)生産者と小中学生との交

校の児 き や収穫体験を実施しました。 松原農業組合に協力 体験後は、 ンなどの野菜の植え付け 城北小学校と彦根西中学 イコンやスイ 童・ 生徒を対象に 児童・生徒か いただ トコ

5 食べてみて、食と農のつな「自分たちで収穫したものを りの小ささにびっくりした」は初めてだったので、あま 初めてだったので、あま「ダイコンの種を見るの

だまま さまな きました きましま さが 良く がりや 農 分かった」

生産者は、

の向

て、生徒は興味深く話を聞地元の歴史の話もされてい各農作業の指導のほかに、 いていました。

ーから提供 給食を新し い 給食センタ

愛荘町給食センターの概要

設備機器を導 町内8校園 提供可能な最新厨房 3、000食を

合致したフルドライシス 学校給食衛生管理基準に ムの採用

ターで仕切り、随所にパめ、各部屋を壁やカウン▼安全衛生基準の確保のた ススル 方式を採用

機の導入による作業効率力ゴごとに自動食器洗浄 の調理室を設置 独立したア レルギ 対応

環境に配慮したオー 化熱源システムを採用 ル 電



発信基地 の 町民開放 として、

研修室を 型の調理

コースも設置しています。 作業を見ることのできる見学 さらに調理や洗浄など一連の

支援事業(豊郷町) 拓事業として加工品開発 地元農産物の新規需要開

った「ダイコンのおろしぽった「ダイコンのおろしぽっ用して豊郷町産の農産生活 グ」を販売されました。 グ」「章姫いちごドレッシン酢」「たまねぎのドレッシン のたび新規需要開拓事業を活 り組まれている2農家が、 地元で採れた農産物を使 して豊郷町産の農産物を使 新たな加工品の開発に取

産物の良さを知ってもらい町 それぞれ「地元でとれた農





にんじん」をはじめとする地取り組みの一つとして「多賀多賀町における地産地消の

んでおられ、今後、更のPRになれば」と、 発により新たな商品の販売が 期待されます。 更なる開 意気込

12

(甲良町)

置

域のイベントなどを紹介しは、情報発信基地として、せらぎの里 こうら交流に す。 を除き、 す。 間使用できるようになりま 駐車場・ がら直売施設の拡充も図りま 平成24年度建設予定の 平 成 24 情報発信基地として、 「交流館」 公衆トイレは、 年中無休で営業. Ιţ

道の駅の登 皆さんのご 録を目指し 施設の整備 年度末には ています。



として皆さんに提供されて

認証を受けて、「多賀そばた「環境こだわり農産物」

「多賀そば」

 \bigcirc

料の使用を5割以下に減ら

割以下に減らし、農薬や化学肥

恵を受けつつ、 ばの産地で、

生産意識の向上へ

元産野菜を学校給食に提供し

こうら交流館_ 年末年始 24 時 じな地

ます。

多賀町は近畿でも有数のそ

豊かな自然の恩

という大切な役割を担って 次世代を担う子どもに届ける 比べて非常に高く、ています。その割合

その割合は近隣と

生産者の

顔が見える安心安全な食材を

ます。

向上にもつながっており、今費者へ安心・安全の提供はもちろん、生産者の生産意識のを地域で消費するという地を地域で消費するという地 問い合わせ先 だきたいと考えています。後も意欲的に取り組んでいた

(多賀町)



の実線の丸で囲んでいるところ)。 敷」の小字名が認められます

(地図

認されていません。 賢昌・昌氏と5代にわたって当地にます。神崎氏高以降、高昌・昌信・ます。神崎氏高以降、高昌・昌信・ます。神崎氏高以降、高昌・昌信・ 城館を構え、 六角氏の下で活躍し 詳細な史料は確 ▲かつての甲崎城跡から荒神山を望む

問い合わせ先 mx.hikone.ed.jp 899番、日メ 課☎26-5833番、FAX26-5 同教育委員会文化財 bunkazai@

探しています。ご存じであれば、地域に埋もれた文化財資料を 同教育委員会文化財課では、

▼甲崎町小字図 甲崎城as all to BHT. 上級数 神崎氏ゆかりの平地城館 泉田 112 m 百年代 大事 ていますが、かつて愛知川の本流はを描いて、北から西へと流れを変え現在の愛知川は、服部町の北で弧 旧愛知川の流れ

連載企画

わたしの町の戦国

第19回

町地は、誌 すが、 ています 寛永年間(1 624~

ることができます 城館に関連する地名を数多く確認す (上図参照)。

まず、現在の集落一帯の小字が「城 「 下 屋 屋

し高くなっており、その上に各集落形成した自然堤防によって土地が少現在も、そのルートは旧愛知川が薩摩町へと流れを刻んでいました。 が帯状に存在しています。甲崎町の 沿って南東から北西へと細長く伸び 集落も例外ではなく、 そのまま北流して甲崎町から湖岸の 自然堤防に

甲崎城跡

甲

明光作

助/森

中原數

崎

et.

から甲崎村に表記が変わったと記し |話『淡海木間攫』によると、甲寛政4年(1792)に編纂され かつて神崎村と称したようで 4 甲 れ 崎 た

この甲崎町の小字名を見ていくと、

吉ノ南

敷」、さ 屋敷」で、その南東側の畑地が さらに西方の畑地にも、また北西側の畑地が

> 堀に囲まれた平地城館の主郭であっ重丸で囲んでいるところ)。この辺りが は「代ノ屋敷」「善平殿」などの小字 名が集中しています(地図中の破線の たと想定されます。 も隣接しています(地図中の実線の二 丸で囲んでいるところ)。また、西側に 「本城地」「馬屋」「土居」などの小字 と 四周に水路を巡らせた内に 「中屋敷」と「下屋敷」 地元ではこの城

いた可能性が考えられます。

神崎氏

海温故録』には、神崎氏は近江守護〜88)に著された近江の地誌『淡が神崎氏です。貞享年間(1684甲崎城の城主と推定されているの